

北海道芦別高等学校

課 程： 全 日 制
学 科： 普 通 科
生徒数： 3 4 1 名

1 取組の特徴

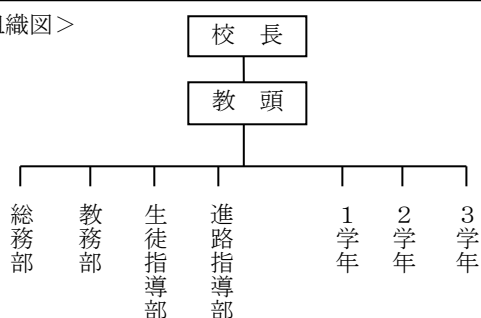
構成的グループエンカウンター等を通して、自己理解・他者理解を深め、自己変容・自己成長を図るとともに他者との間で思いやり、助け合い、支え合う人間関係を育む。

2 取組のねらい

円滑な人間関係を構築する力を育成し、そのことにより自己理解の深化や自己改善の手法を習得することを目指す。

また、教員の予防的・開発的な教育相談スキルの向上を目指す。

<組織図>



3 取組の経過

4 月

- 1 年・宿泊研修において構成的グループエンカウンターを実施
 - ・「ほっと」の実施
- 2 年・各HRにおいて構成的グループエンカウンターを実施
 - ・学年全体でのアサーショントレーニングを実施
 - ・「ほっと」の実施

5 月

- 1 年・望ましいコミュニケーションについて考える取組（全体を対象に実施）
- 全校・ケータイ安全教室における異学年男女混合グループによるディスカッション（KJ法）

8 月

- ・トレーニング実施に向けた外部講師による校内研修会

9 月

- 1 年・スクールカウンセラーによる望ましいコミュニケーションについて考える取組（各HRごとに実施）
- 全校・薬物乱用防止教室における異学年男女混合グループによるディスカッション（ワールドカフェ方式）

11 月

- 1 年：スクールカウンセラーによる望ましいコミュニケーションについて考える取組（各HRごとに実施）
- ・「ほっと」の実施

4 取組の内容

1 コミュニケーションスキルを育成する集団カウンセリング（1、2年で実施）

- ・非言語によるコミュニケーション（1年）
- ・アサーショントレーニング（2年）
- ・望ましいコミュニケーションについて考える取組（1年：ほめほめゲーム等）

<生徒の感想>

- ・言葉がなくても耳や目を使ってコミュニケーションができることに気づいた。
- ・入学直後で話をしたことのない人と話をする機会があって良かった。
- ・相手を尊重しながら会話することはとても難しいと感じた。

4 取組の内容

2 コミュニケーションスキルを生かす活動（グループディスカッション）

生徒が、日常的に会話をしたことの無い相手と一緒に考え、考えを共有するコミュニケーションの場面を設定した。

(1) ケータイ安全教室（5月）

KJ法については、1年生のみ宿泊研修で経験済みであったが、すぐに慣れ円滑にディスカッションができた。

異学年男女混合グループに最初は戸惑いがあったが、次第に慣れ、積極的に自分の意見を発表することができた。



(2) 薬物乱用防止教室（9月）

ワールドカフェ方式については、初めての試みであったが、すぐに慣れ円滑にディスカッションができた。

異学年男女混合グループでのディスカッションは、2度目であり、積極的に自分の意見を発表することができた。



5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

平成27年度は、全校で、中途退学者数0人、不登校生徒数0人であった。

イ その他の指標による評価

一人当たりの欠席日数が、1.25日減少した。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

4月には自己表現が苦手な生徒が多く、集団としての緊張度も高い状態であったが、コミュニケーショントレーニングの取組を通して、自己表現系の項目が改善し、アサーティブな人間関係（相手も自分も大切に作る人間関係）が構築され、集団としての親和性も高まったことが11月の結果から分かった。

エ 生徒の変容した姿

友人関係の幅が広がり、集団の親和性が高まった。また、コミュニケーションスキルの向上によりアクティブ・ラーニングを円滑に行うことができるようになった。

2 課題

ア コミュニケーションスキル向上のためのトレーニングを全学年で実施する必要がある。

イ アサーティブな人間関係を構築するため、アサーショントレーニングを充実させる必要がある。

3 次年度に向けて

ア 全校的な取組に発展させる。また、「ほっと」の分析を学年やHR経営に生かすとともに、個人面談等においても活用する。

イ 各教科や特別活動等で導入しているアクティブ・ラーニングを通して、コミュニケーションスキルの向上を図る。

北海道札幌北高等学校

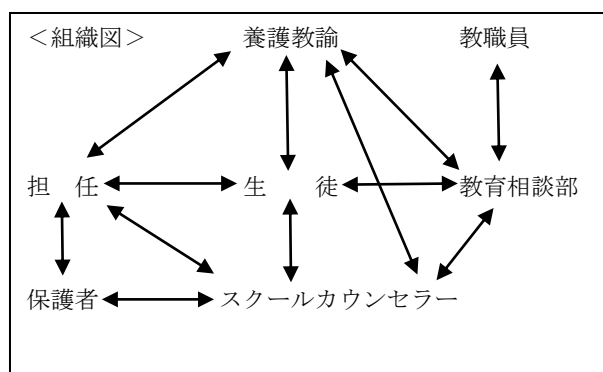
課程： 全 日 制
学 科： 普 通 科
生徒数： 960名

1 取組の特徴

- (1) スクールカウンセラー（SC）による個別カウンセリングの実施
- (2) SCを活用した講演会等の実施
- (3) アクティブ・ラーニング型授業の推進

2 取組のねらい

友人関係を主とした人間関係形成能力の向上を図るとともに、学習面・進路面に係る悩みを抱えている（特別な支援を必要としている）生徒に対し、きめ細かい支援を行い、そのための組織的校内支援体制の構築・整備に努める。



3 取組の経過

<年間を通じた取組>

- 4～3月 ・SC個別カウンセリング
・教員へのコンサルテーション
- 4月 ・オリエンテーション及びPTA総会にてSCに関する広報活動
・SCたより発行
・意識調査及びMG検査実施
- 6月 ・意識調査及びMG検査分析

- 7月 ・学校祭による集団行事への取組
・生徒理解のための会議（1回目）
- 10月 ・PTAと教職員講演会（講師 北大常勤SC）
- 11月 ・意識調査、分析
- 12月 ・生徒理解のための会議（2回目）
- 3月 ・「ほっと」実施（1年生）

4 取組の内容

1 仲間作り

毎年度の始めに実施している宿泊研修において、「仲間作り」を目的としたプログラムを取り入れている。今年度は、綱引きやウォークラリーなど、仲間と協力しながら取り組むプログラムを複数実施した。

まだお互いのことをよく知らない生徒同士が、体を動かしながら協力し合うことにより、生徒間の距離は目に見えて縮まった。



宿泊研修での綱引き大会

4 取組の内容

2 SCの活用

SCによる生徒へのカウンセリングは1月までに102件行われた。

SCとの面談を通して、精神的重圧や負担を軽減させ、前向きに学校生活を送ることができるようになった生徒も多い。カウンセリング後、SCからもたらされる助言等は、教育相談部を通じて、学級担任と養護教諭・各家庭間で共有され、生徒一人一人への理解が深まり、具体的な支援に役立てることができた。

本校においては、SCとの日常的な連携・協力をもとに、「生徒理解に関する会議」（年間2回）を開催し、生徒の実態に即した具体的な指導や支援の方策について全教職員で協議し、共通理解に努めている。また、全学年・全学級において年間2回の保護者面談を実施し、全校体制で家庭との連携強化に努めている。今年度スクールカウンセラーと面談した保護者数は計8名、家庭と学校・スクールカウンセラーがしっかりと連携、繋がって課題解決に至ったケースも多い。

3 教科指導の工夫・改善

本校は道内有数の進学校であるため、学業の不調に起因する悩みを持つ生徒が多い。また、登校への不安、進路や人間関係・家族関係等の悩みを抱え、身体的・精神的に不安定な状態となる傾向の生徒も少なくない。そのため、本校では、アクティブ・ラーニング型授業を各教科において積極的に導入し、コミュニケーションスキルの育成を図る取組を行っている。ディスカッションやディベート、グループワークやプレゼンテーション等の能動的・協働的な学習を取り入れた参加型授業を通し、学力・学習意欲の向上はもとより、仲間意識の醸成や集団づくり、コミュニケーションスキルの向上を図っている。



アクティブ・ラーニング型授業の様子

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者数、不登校生徒数とも昨年比でそれぞれ1名ずつ減少している。

イ その他の指標による評価

生徒一人当たりの欠席日数が0.1日減少した。

ウ 意識調査の実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

学校行事や授業等を通じて、生徒のコミュニケーション能力が向上するとともに、自己有用感を持ってない生徒数が、学年を経るごとに減少している。

エ 生徒の変容した姿（3学年意識調査から）

H27 3学年意識調査	1年1回	1年2回	2年1回	2年2回	3年1回
一人であることが心配●	63.8%	56.6%	55.0%	53.8%	53.7%
自分は役に立たない■	33.9%	29.2%	30.4%	26.6%	26.1%
自分がみじめと感じる▲	24.5%	23.3%	22.3%	20.8%	20.3%

自分にマイナスのイメージを持つ生徒は学年を追うごとに減少している。

2 課題

ア 学業不調等で悩みを持つ生徒、発達障がいを抱える生徒等に対する心のケア、自己マネジメント力の育成について、全教職員の共通理解による具体策の検討。

イ SCを含めた組織体としての機能の活性化。

3 次年度に向けて

本校では、学業の不調に起因する悩みを持つ生徒が多く、加えて、進路や人間関係・家族関係等の悩みを抱え、精神的・身体的に不安定な状態となっている生徒も増えてきているのが現状である。そのため、今後もスクールカウンセラーと連携・協力し、有効な対策・支援を一体となって継続的に行っていく必要がある。

北海道札幌東豊高等学校

課程：全日制

学 科：普通科

生徒数： 918名

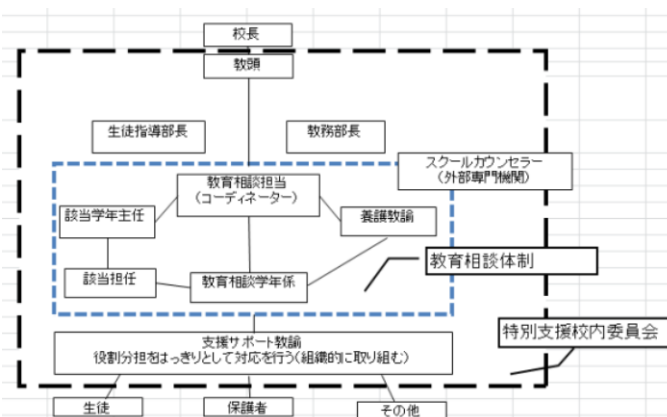
1 取組の特徴

ボランティア活動など様々な体験活動の機会を通してコミュニケーションスキルの育成を図り、人間関係形成能力を高める。

2 取組のねらい

ボランティア活動など様々な体験活動を通して人間関係形成能力を高めるとともに、子ども理解支援ツール「ほっと」等を、生徒との個別相談や教員及び保護者への助言及び指導資料として活用し、スクールカウンセラーの活用による教育相談の充実を図るとともに支援体制を充実させる。

＜組織図＞



3 取組の経過

4月・心理検査TK式M2-DV実施

- ・町内清掃ボランティア実施

6月・心理検査TK式M2-DVの活用

- ・宿泊研修（集団カウンセリング）実施

7月・交通安全啓発活動実施

- ・校内研修開催
- ・東区地域子ども夏祭り参加

10月・子ども理解支援ツール「ほっと」実施

11 月・学校評議員と生徒会執行部による異世代交流実施

2月・札幌雪まつり（つどい会場）参加

<通年>

- ・生徒玄関での教員と生徒会執行部による毎朝の挨拶運動を実施
- ・スクールカウンセラー教育相談会実施

4 取組の内容

1 朝の挨拶運動

ア 時期 通年

イ ねらい 学年を越え、場に応じた適切な挨拶を通してコミュニケーション能力の向上を図る。

ウ 内 容 登校時間に生徒会役員が生徒玄関に立ち、登校してくる全ての生徒に声かけを行っている。また、全ての教員が、1週間のうち1度は生徒会役員とともに朝の挨拶運動に参加している。

エ 成果等 当初、挨拶ができなかった生徒も、次第に挨拶ができるようになるなど、人間関係構築の基盤づくりに役立っている。また、教員が生徒の朝の様子を観察し、気になる生徒には声かけや教育相談を行うことで、問題行動等の未然防止に役立っている。

4 取組の内容

2 校内研修

- ア 実施日 平成 28 年 2 月 25 日（木）
イ 講師 全日本カウンセリング協議会認定カウンセラー 土 井 敦 子 氏
ウ 内 容 スクールカウンセラー土井先生を講師として教育相談の手法を学び、生徒理解の機会を増やし、クラス経営や集団形成に役立てる。

3 さっぽろ雪まつりボランティア

- ア 実施日 平成 28 年 2 月 11 日（木）
イ 対 象 有志生徒
ウ 内 容 今年度は、36 名の有志生徒が、「さっぽろ雪まつりつどーむ会場」子ども広場の会場スタッフとしてボランティア活動を行った。生徒は、来場者が楽しく過ごせるよう、竹スキーや滑り台、輪投げなどの催し物を担当した。



さっぽろ雪まつりでのボランティア活動の様子

- エ 成果等 今年度は、特に、スタッフを務める地域の方々との交流が深まり、生徒たちは、仕事を任せられ感謝されることで自己有用感を高めた。また、来場した子どもたちに催し物の内容を説明することを通して、異年齢間でのコミュニケーションをとることの難しさやコミュニケーションがとれた際の充足感を得ている様子が見られた。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

不登校生徒数及び中途退学者は、昨年度は減少したが、本年度は増加し、平成 25 年度以前の数字に近づいた。過去 5 年間の推移を見ると減少傾向にある。

イ その他の指標による評価

- ・保健室年間相談者数が 1 年生で増加しているが、3 年生になり減少傾向が見られる。
- ・ボランティア活動等体験活動の参加者人数（延べ人数）が 2 倍以上増加した。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

- ・男子は全学年全クラスで「称赞」と「遵守」が低く、「拒否」が高いという昨年度と同じような傾向が見られ、「4 因子」の得点傾向は「自己統制」が低い傾向が見られた。
- ・女子も昨年度と同じ全学年全クラスで「忠告」と「拒否」が低く、「緊張」が高い傾向が見られ、「4 因子」の得点傾向は「自己統制」が低く、「関係維持」が高い傾向が見られた。
- ・1 月、北海道医療大学大学院心理室の協力の下、特定分野に偏らない包括的調査を実施するとともに、直接フィードバックを受ける研修会を実施し、その後の教育相談に活かせることができた。

2 課題

- ア スクールカウンセラーを活用した教育相談の更なる充実が来年度の課題である。
イ 各種検査をさらに活用し個別の支援計画を適宜作成する。

3 次年度に向けて

- ア 定期的なスクールカウンセラーによる教育相談及び研修会の充実を図る。
イ 生徒主体による地域への様々な活動を、より一層促進し、自己有用感を持たせるように計画する。

北海道札幌琴似工業高等学校

課 程： 全 日 制
学 科： 工 業 科
生徒数： 932名

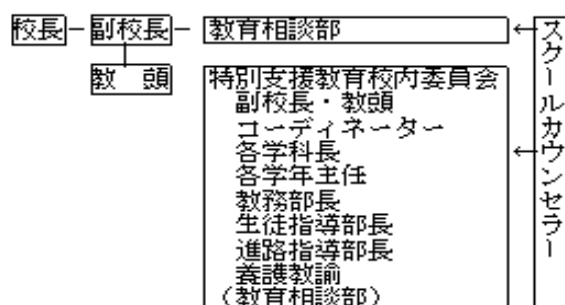
1 取組の特徴

予防的・開発的教育相談を通して、日常の学校生活ばかりでなく進路実現や社会生活において必要不可欠なコミュニケーション能力のスキルアップを図る。

2 取組のねらい

- ・ 集団カウンセリング及び体験的な活動を通じたコミュニケーション能力の育成。
- ・ 生徒のコミュニケーション能力の育成を推進するための教職員研修の充実。

<組織図>



3 取組の経過

※ 個人面談は通年（不定期）で実施

- | | |
|--|---|
| <p>4 月 ・ アセスメントに関する教職員研修
対象：1 学年担任
内容：アセスメントの種類・目的・データの読み取り方・利用方法について</p> <p>・ 「ASSESS」（1 回目）の実施
対象：全学年</p> <p>5 月 ・ 教科合同会議での生徒の状況把握</p> <p>6 月 ・ 校内研修会（1 回目）
主催：特別支援教育校内委員会
「配慮を要する生徒、気になる生徒、不登校傾向にある生徒の状況について」</p> <p>・ 校内研修会（2 回目）
講師：太田 滋春 氏
(本校 S C)
「特別支援に関わる生徒の具体的な対応と実践」</p> <p>7 月 ・ 校内研修会（3 回目）
対象：1 学年担任
『「ほっと」実施の目的、分析、活用方法について』</p> | <p>7 月 ・ コミュニケーションスキルアップ教室
対象：1 学年生徒全員
講師：太田 滋春 氏
「スマイルトレーニング」とコミュニケーションスタイル
「ほめっせーじとだめっせーじ」</p> <p>8 月 ・ 「ほっと」の実施</p> <p>9 月 ・ 教科合同会議での生徒の状況把握</p> <p>10 月 ・ 「ほっと」の分析結果のシェアリング</p> <p>12 月 ・ 「ASSESS」（2 回目）の実施
対象：1・2 学年</p> <p>2 月 ・ 「ASSESS」（2 回目）の分析結果のシェアリング
・ 校内研修会（4 回目）
「生徒理解を深めるために」</p> |
|--|---|

4 取組の内容

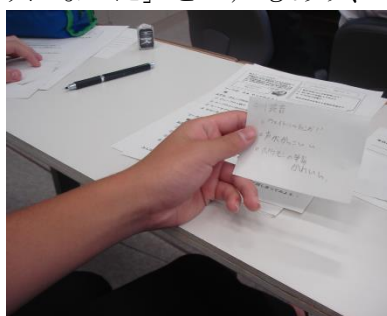
1 教職員研修

- ア 『学校環境適応感尺度「ASSESS」の実施に関して』（対象：1 学年担任）
 - ・アセスメントの種類と目的、「ASSESS」実施の理由と検査の特徴、データの利用方法と利用上の注意点について
 - ・結果分析と情報交換（対象：全学年担任、全学年教科担任）
- イ 『子ども理解支援ツール「ほっと」に関して』（対象：1 学年担任）
 - ・実施の目的、データの読み取り方、利用方法について
 - ・結果分析と情報交換（対象：1 学年担任、1 学年教科担任）
- ウ 校内研修（1 回目：全職員対象）
 - 『配慮を要する生徒、気になる生徒、不登校傾向にある生徒の状況について』
 - ・該当生徒の特徴や状況の説明
 - ・配慮等の確認、情報共有
- 校内研修（2 回目：全職員対象）
 - 『特別支援に関わる生徒の具体的な対応と実践』（講師：太田 滋春 氏）
 - ・発達障害の特徴とサポート
 - ・学校でできる声かけ、配慮



2 コミュニケーションスキルアップ教室

- ア ねらい 高校生の人間関係を形成する力やコミュニケーション力の育成を図り、不登校や中途退学を予防・未然防止することにつなげる。
- イ 対象 1 学年全員
- ウ 内容
 - 『こころのスキル コミュニケーション』～笑顔になると色々とうまいく
 - ・コミュニケーションの姿勢と表情の重要性についての説明
 - ・表情筋トレーニング（体験ワーク）
 - ・スマイルトレーニング（体験ワーク）
 - 『ほめっせーじを大事にしたコミュニケーション』
 - ・パンダキャラクターをモデルにしたコミュニケーションスタイルの紹介と対応の仕方（ほめるメッセージとダメだしメッセージの効果と適切なコミュニケーションの取り方）
 - ・ほめっせーじのアドバイス（アサーショントレーニング）
 - ・ほめっせーじによる仲間の良いところの書き出しと告白（エンカウンター）
- エ 成果 学級開きをしてから約3ヶ月経過した中での実施であったが、コミュニケーションに戸惑う生徒がいる。開始直後は表情も硬く、ぎこちなさや緊張した様子も見えたが、講師主導による体験活動とトレーニングによって、次第に生徒の表情がほぐれ、元気な声や笑い声が聞こえるようになった。「短い時間ではあったが楽しく活動できた」「相手が前向きになる言葉のかけ方をしたい」などの感想があった。また、担任から「クラス内の生徒相互のコミュニケーション活動を深めるきっかけになった」との声もあり、一定の成果を得ることができた。



5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者、不登校生徒数ともにほぼ同数であった。

イ その他の指標による評価

- ・スクールカウンセラーの面談者数は、生徒、保護者、教職員ともに倍増し、心的負担の軽減につながった。
- ・欠席日数は昨年とほぼ同数であった。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

- ・今年度初めて1学年で1回実施した。複数回実施し、生徒の変容をとらえる必要があり、学校における「ほっと」の位置付けを明確にし、教育活動を展開したい。
- ・13因子では『学業』『相談』の相談項目に低い特徴が表れている。教師と生徒、生徒と生徒の間に話しやすい雰囲気を作り、生徒が自己開示しやすい環境を作っていくことが必要である。また、『自律』『率先』についても、コミュニケーションを苦手とする生徒が各クラスに半数程度いることが分かった。

エ 生徒の変容した姿

- ・コミュニケーションスキルアップ教室が、ほとんどの生徒にとってスクールカウンセラーとの初顔合わせになる。これがきっかけとなってカウンセラー面談につながっていくケースがあった。また、集団トレーニングを実施することでクラスの人間関係が円滑になり、その後の行事やクラス経営が円滑に進んだ。
- ・アセスメントの結果を教員間で共有することで、生徒の実態を把握することができ、生徒を指導する上で、貴重な参考資料として活用できた。

2 課題

ア 7月上旬に1学年で実施したコミュニケーションスキルアップ教室は、生徒、担任から大変好評であった。生徒間の人間関係をより円滑にするための手助けや担任がクラス経営をする上で時期的な見直しをする必要がある。スクールカウンセラーとのスケジュールを早い段階で調整し、今後も継続して集団トレーニングを行うこと。

イ 中途退学や不登校に陥る生徒を未然に防止するため、中学校との引き継ぎ（中高連携）の取組を進めること。

ウ 教育相談部と校内組織の連携に関すること。

エ 「ASSESS」と「ほっと」の有効な活用法や研修の実施に関すること。

3 次年度に向けて

ア クラスの人間関係が大きく影響する体育大会や学校祭等の行事を迎える前に、コミュニケーションスキルアップ教室を実施できるように年間計画に位置付ける。

イ 本校で作成した生徒支援引き継ぎシートを活用して中学校との連携を図り、支援が必要な生徒や不登校傾向にある生徒の実態を把握し、生徒指導や教育相談を進める。

ウ 特別支援教育校内委員会や生徒指導部と情報を共有し、教育相談をより充実、発展させる。

エ 「ASSESS」と「ほっと」の実施に関しては、担任向けに、目的、実施の理由、検査の特徴、データの利用方法、利用上の注意点等の研修会を開催しているが、教職員全体で研修を深める。

オ 各種研修会への参加で身に付けたカウンセリングの手法やコミュニケーションスキルの育成法を学校、生徒に還元する。

カ 「ASSESS」は年2回実施しているが、「ほっと」を複数回実施し、経時比較することで生徒一人一人の変容やクラス全体の状況を把握する。

北海道札幌北陵高等学校

課程：全日制
学科：普通科
生徒数：956名

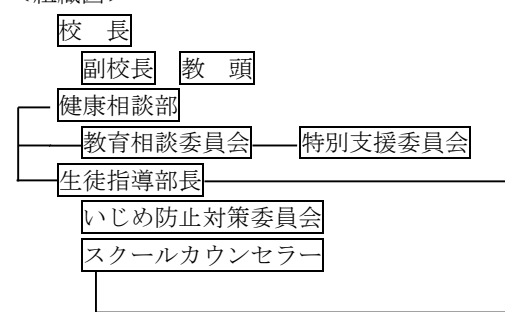
1 取組の特徴

- スクールカウンセラー（SC）による講話及び個別カウンセリングの実施
- 総合的な学習の時間におけるコミュニケーションスキルトレーニング（CST）の実施
- 生徒会及びボランティア委員会による地域との積極的な交流

2 取組のねらい

- (1) 生徒がSCに自分自身の悩みなどを打ち明けることにより、学校生活から生じる精神的重圧や負担を軽くすること。
- (2) SCの助言を、健康相談部を通じて担任や養護教諭が共有し、生徒一人一人の学校生活への支援に役立てること。
- (3) 校内研修会を通して生徒理解を深め、教職員全体での協力体制を構築すること。

<組織図>



3 取組の経過

- 4月 ・宿泊研修でのCSTの実施
- 5月 ・SCによる「健康講話」の実施
・ボランティア委員会及び有志による「保育ボランティア」を実施
- 5～7月 ・総合的な学習の時間におけるCST（計6回）を実施
- 6月 ・第1回目「ほっと」の実施
- 10月 ・ボランティア委員会及び有志による「保育ボランティア」を実施

- 11月 ・外部講師を招聘しての「いじめに関する校内研修会」を開催
- 2月 ・第2回目「ほっと」の実施
- 3月 ・「ほっと」の検証と新クラスへの引継ぎ
- <通年による実施>
- 4～3月 ・ボランティア委員会及び有志による「地域清掃・除雪」を実施
・SCによる個別カウンセリングの実施（計21回）

4 取組の内容

1 SCの活用

本校の取組の中心は、SCによる生徒及び保護者へのカウンセリングであり、2月までに計20回で38件行われた。

5月には1学年生徒対象に「イヤな気持ちは変えられる！～気持ちを上手にコントロールする方法～」と題して健康講話を実施した。（写真）

近年、学業に悩みを抱え、心理的に不安定となる生徒が増加する傾向にあり、大変有意義な講話となった。



「健康講話」の様子

4 取組の内容

2 総合的な学習の時間でのC S T

本校に入学した生徒に、約半年を掛けて「君は北陵生になれたか」をテーマに導入期指導が行われ、その中で様々なC S Tが行われる。

入学して1週間後に行われる「宿泊研修」において、アイスブレイクや綱引きによって仲間意識を高め、クラスや学年の団結力を高めた。(写真)



「宿泊研修」での人間知恵の輪

3 生徒会およびボランティア委員会の活動

地域との連携の取組として、ボランティア委員会による様々な取組の中で、近隣の保育園での保育ボランティアや特別支援校へ出張公演、そして地域清掃及び地域除雪活動を行った。

特に地域清掃においては複数回実施することで、近隣住民からも高く評価されている。この活動は、委員会だけでなく、部活動単位で多くの生徒が参加した。(写真)



落ち葉拾いの様子

4 教職員対象の「研修会」の実施

11月25日(木)に、北海道教育大学札幌校准教授を講師に招き、「いじめとかかわることとはどういうことか」をテーマに研修会を行った。

いじめを「いじめる側」の視点でとらえ、その心理や定義付け、いじめが進行する構造を考察することにより、いじめ把握の要点を学ぶとともに、初期対応と未然防止の在り方を改めて確認するなど、多くの示唆に富んだ研修会とすることができた。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者数は前年度2名、今年度1名で1名減少し、不登校生徒数は前年度0名、今年度1名だった。

イ その他の指標による評価

保健室利用者は前年度987名、今年度1099名と増加したが、相談件数は前年度43名、今年度35名と減少した。また、欠席総数は今年度1月末現在2782で、昨年度の2753を上回っている。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

クラスによってばらつきはあるものの、要素偏差値はほぼ50～55で平均しており、社会的スキルは非常にバランスよく身に付いている。

エ 生徒の変容した姿

本校生の多くは日常の挨拶や礼儀が身に付いているが、特にボランティア活動の参加生徒数が、前年度の405名に対して、今年度1月末現在で770名となっており、地域とのコミュニケーションを図ろうとする態度が養われた。

2 課題

ア 「ほっと」を活用した生徒把握と指導についての教員研修の充実

イ 様々な悩みを抱える生徒を支援する学校体制の強化

3 次年度に向けて

本校の教育相談委員会及び特別支援委員会を活性化させ、スクールカウンセラーと連携することで、学業ばかりでなく様々な悩みを抱える生徒を早期に把握し対応していくとともに、組織的に対策を立て支援を行い、検証していく。

北海道野幌高等学校

課程：全日制

学科：普通科

生徒数：744名

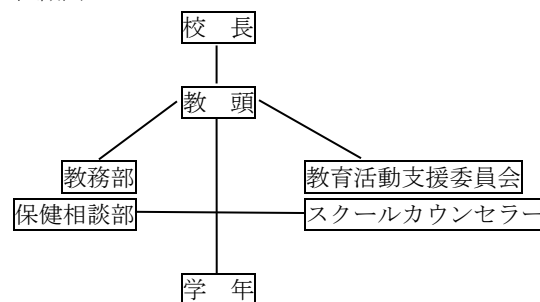
1 取組の特徴

生徒に対して、個別カウンセリングや人間関係づくりを支援するための講話及びソーシャルスキルトレーニングを通して、生徒の人間関係を形成する能力やコミュニケーション能力の育成を図るとともに、教員に対して、開発的・予防的・問題解決的カウンセリングや個別・集団カウンセリングの手法の習得及び向上を図る。

2 取組のねらい

基本的生活習慣や人間関係づくりの能力等、社会適応力が十分身に付いていない生徒に対し、スクールカウンセラーと連携し、教育相談や人間関係構築の方法等の学習・体験の機会を設け、学校目標にある自立した生徒の育成を目指す。

<組織図>



3 取組の経過

4月 スクールカウンセラーとカウンセリング内容の協議、生徒へのカウンセリング
5月 生徒及び保護者へのカウンセリング、薬物乱用防止教室
6月 生徒及び保護者へのカウンセリング
7月 生徒及び保護者へのカウンセリング
8月 生徒及び保護者へのカウンセリング

9月 生徒及び保護者へのカウンセリング、個別の教育指導計画作成・検討
10月 生徒会リーダー研修、子ども理解支援ツール「ほっと」の実施
11月 「ほっと」分析と活用の教職員研修
12月 生徒へのカウンセリング
2月 生徒へのカウンセリング
3月 カウンセラーによる人間関係講話、ソーシャルスキルトレーニング

4 取組の内容

- 1 スクールカウンセラーによる教員研修
 - ・スクールカウンセラー来校日にカウンセリングの手法等の研修を実施
 - ・スクールカウンセラーによる研修資料の配付
- 2 スクールカウンセラーによる保護者カウンセリング
保護者の希望により、適宜カウンセリングを実施
- 3 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施（10月）
- 4 生徒会リーダー研修（10月実施）
 - ・老人ホーム訪問や地域清掃ボランティア活動
地域の老人ホームへの訪問や地域清掃等のボランティア活動を通じて、異年齢の方との人間関係づくりの手法や奉仕活動の精神を学習し、生徒会活動に還元する方法を検討した。



地域清掃等のボランティアの様子

4 取組の内容

5 人間関係づくりの講話、ソーシャルスキルトレーニング（3月実施）

スクールカウンセラーを講師に迎え、1年生・2年生を対象に人間関係づくりの講話、ソーシャルスキルトレーニングを実施し、自他への尊重と自己有用感の大切さを学ぶとともに、いじめの未然防止やコミュニケーションの重要性等について一人一人が考える機会を設けた。

6 地域の自治活動への参加

地域の自治活動を実施している団体の方と懇談し、異年齢との交流及び地域に開かれた学校づくりについての研修を実施した。今年度は、地域で開催された「オレンジRUN えべつ」に参加し、地域の方々に混じって大会運営に協力しました。参加した生徒からは、周りから暖かい声をかけられ、地域に貢献することの大切さを学んだなどの感想が聞かれました。



「オレンジRUN えべつ」参加の様子

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者及び不登校生徒は減少し、個々の生徒の人間関係づくりの悩みや困難を早期に把握し、兆候のある生徒に対し、即時に対応できるようになった。

イ その他の指標による評価

スクールカウンセラーによる人間関係づくりの講話やソーシャルスキルトレーニングを実施し、お互いの個性や自己有用感の尊重、いじめの未然防止やコミュニケーションの重要性等について考える機会を設けた。

スクールカウンセラーと連携した生徒及び保護者のカウンセリングを実施し、生徒及び保護者の抱える課題の把握と適切なサポートに努めた。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

「礼儀」「表明」の項目が高い数値であり、積極的に挨拶などを行い、コミュニケーション力を身に付けようとしている。

「称賛」「配慮」の項目が低い数値であり、自己中心的であり、相手を理解し認めることができず、人間関係づくりが苦手である。

エ 生徒の変容した姿

教育活動支援委員会、養護教諭、学年団及びスクールカウンセラーとの連携のもと、生徒理解の取組により、お互いを尊重する精神やコミュニケーション力を身に付け、より良い人間関係を築こうとする姿勢が見られるようになった。

2 課題

ア 学校不適応生徒による中途退学者を減少させるためのより効果的・具体的な支援

イ 子ども理解支援ツール「ほっと」を活用した生徒理解と活用の充実

3 次年度に向けて

ア 教育活動支援委員会の機能を向上させた個別の指導計画の充実

イ 教育相談等を組織的に対応する校内体制の強化

北海道江別高等学校

課程： 全日制

学科： 普通科 事務情報科 生活デザイン科

生徒数： 938名

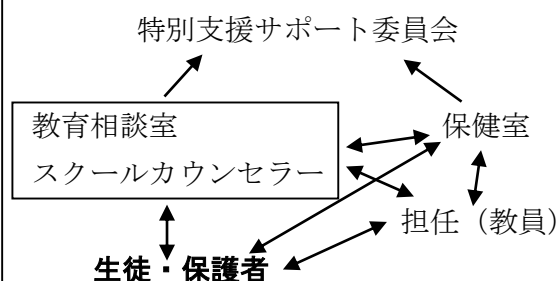
1 取組の特徴

- (1) 生徒が持っている自己開示や他者理解及び人間関係を調整する能力を伸ばし、望ましい学年や学級集団づくりを目指そうとする意欲を育てるために、保健局員の生徒及び希望者に対してスクールカウンセラーによるピア・サポート研修会を月に1回のペースで実施している。
- (2) スクールカウンセラーや外部専門家を講師に1・2年生全員を対象とした保健講話を実施し、心理的教育支援を行っている。

2 取組のねらい

スクールカウンセラーとの連携のもと、生徒個々の自己開示や他者理解及び人間関係を調整する能力を伸ばし、望ましい学年や学級集団づくりを目指そうとする意欲を育てる。また、教育相談に対する教職員の理解を促進し、カウンセリングマインドを高める。

<組織図>



3 取組の経過

4月 保健局年間活動ガイダンス	10月 2年保健講話「高校生のメンタルヘルス」
5月 1年保健講話「高校生のメンタルヘルス」	ピア・サポート研修会④
6月 Hyper Q-Uの実施（1学年）	11月 ピア・サポート研修会⑤
ピア・サポート研修会①	12月 ピア・サポート研修会⑥
7月 ピア・サポート研修会②	1月 ピア・サポート研修会⑦
9月 ピア・サポート研修会③	2月 ピア・サポート研修会⑧

4 取組の内容

1 保健講話（1年生向け）

- ア ねらい** 新しい環境に精神的な緊張や不安を抱えがちな新入生が、青年期の心の在り方やストレス・マネジメント及びコミュニケーションスキル、ソーシャルスキル等について学ぶ機会とする。
- イ 対象** 1学年生徒（8学級 320名）
- ウ 内容** スクールカウンセラーから、高校生と中学生の心理的特徴の違いや高校生特有の心理的特徴について説明があった。また、心のSOSは体の変化に現れやすいことや心の手当方法などについても説明があった。
- エ 成果等** 生徒からは、『傷つきやすくなった＝自分が弱くなったということではない』という言葉が心に響きました』などの感想が寄せられ、思春期の特徴について理解が深まった様子が見られた。

2 保健講話（2年生向け）

- ア ねらい** 友人や親子などの人間関係や進路選択に関わって自己の在り方に悩みや不安を抱えがちな時期において、青年期の心やコミュニケーションスキル及びストレス・マネジメント等についての知識を得て、自分自身を見つめ直す機会とする。

4 取組の内容

イ 対 象 2 学年生徒（8 学級 306 名）

ウ 内 容 現在の若者を取り巻く諸問題について説明があった。また、LINE に見られるような若者のコミュニケーションに変化が生じたこと、それによって引き起こされるいじめの問題や対処法について説明があった。

エ 成果等 対人関係において、周りに合わせなければいけない状況が多々あり、身近な LINE の問題点に共感した生徒も多く、目の前の人とのコミュニケーションの大切さについて改めて確認できたようであった。

3 ピア・サポート研修会

ア ねらい 参加生徒が自己を知り「他者と出会う」ことができるようになることで、学級集団内によりコミュニケーションが生じることを期待する。

イ 対 象 生徒会保健局員及び希望者（計 54 名）

ウ 内 容 放課後、月 1 回程度（全 8 回）、「自己紹介と他己紹介」「トラスト・ウォーク」「アサーション・トレーニング」などを、8～10 人程度のグループに分かれて実施した。記述式ワークやグループ内でのシェアリングを行い、実施内容の理解の深化を図った。



トラスト・ウォークの様子

エ 成果等 1 グループに教員 1 名がついて実施した。グループ内で自分の気持ちや考えを話し、自分の発言がグループのメンバーに受け入れられていることを繰り返し体験することで、当初は大変緊張し小声で話していた生徒たちも、お互いの顔を見合いながら発言したり、他者の発言を聴くことができたりするようになった。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者数は昨年度から減少した。また、不登校生徒数も大幅に減少した。

イ その他の指標による評価

年間の保健室における相談者数（延べ人数）が 102 人から 48 人と大幅に減少した。また、一人当たりの欠席日数も 2.9 日から 2.8 日と 0.1 ポイント減少した。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

男子は自己を抑制しつつ、他者の長所を承認し、互いを認め合おうとする力が弱い傾向が見られる。また、女子は他者に対する社会的な働きかけの弱さや周囲に気を遣って自分の意見を主張できない傾向が見られる。

エ 生徒の変容した姿

ピア・サポート研修会に参加した生徒を中心に、コミュニケーションスキルの向上が見られ、他人の気持ちを想像することに積極的になっていく内的な変化の様子が見られる。

2 課題

保健局員を中心とした研修の継続と日常的なピア・サポート活動を定着させ、活動に対する全校生徒及び教員の認知度を高めるために教育的な支援を行う必要がある。

3 次年度に向けて

前年度に引き続きスクールカウンセラーとの連携による保健局のピア・サポート研修会を実施するとともに、その内容をバージョンアップさせつつ、局員を中心とした日常的なピア・サポート活動の展開を目指す。

北海道有朋高等学校

課程： 単位制
学科： 普通科・事務情報科
生徒数： 343名

1 取組の特徴 ～ 北海道医療大学との連携

- (1) 臨床心理学科の大学生によるピア・サポート及び学習支援
- (2) スクールカウンセラーによるカウンセリング
- (3) スクールソーシャルワーカーによる生徒支援や関係機関との連携

2 取組のねらい

各年次において、中学校時代の不登校経験者がほぼ半数、そのうち3割近くは欠席日数が100日以上あり、中には欠席日数が500日を越える生徒も数名みられる。また、前籍をもつ生徒が約25%おり、過去に多くのトラウマを抱えながら入学してくる生徒が多い。

いじめや学習の遅れなどによる自信喪失のため、授業の参加に意欲を失い、現在もそのことが原因で学校生活に支障をきたしている生徒が多い。そのような生徒にコミュニケーションスキルの向上によって自信を持たせ、より円滑な人間関係を構築できるよう支援する。支援に当たって、平成24年度から北海道医療大学心理科学部臨床心理学科の「臨地実習」に関わる学生の全面的協力を受け、取り組んでいる。

<組織図>

サポート委員会

教頭2名、養護教諭2名、年次主任4名
生徒指導部長、教務部長、当該担任

サポート委員会の支援方法

- ①ガイダンス ②コンサルテーション
③コーディネート ④プロモーション

具体的支援方法

- ①スクールカウンセラー
②スクールソーシャルワーカー
③ステップアップ・プログラム
④若者サポートステーション
⑤特別支援パートナーティーチャー

連携
専門機関

校内研修会・職員会議・共通理解

連携

保護者

3 取組の経過

○ 平成24年度

様々に支援が必要な生徒が増えてきたことを受けて、特別支援委員会をサポート委員会に再編した。

◆活用した生徒への支援策◆

- ①特別支援パートナーティーチャー
- ②スクールソーシャルワーカー
- ③スクールカウンセラー
- ④高校生ステップアップ・プログラム
- ⑤札幌若者ステーション

○ 平成25年度

大学生によるピア・サポート及び学習支援を実施し、生徒が進路相談をはじめ様々な悩みを相談する姿が見られた。また、ピア・サポート等を通して、大学生との交流を楽しむ生徒がでてきた。

○ 平成26・27年度

平成25年度の取組を継続した。昨年までに経験した生徒も多くなり、主体的に活動に参加する生徒が増えてきた。反面、参加者が固定され、参加人数が増えないという課題も出てきている。

4 取組の内容

○ 北海道医療大学臨床心理学科の大学生を中心としたピア・サポートと学習支援

ア PR活動

- ・当初、1回2時間、計5回（10月7日～12月9日）の機会を設定した。
- ・1年次の全HRを訪問し、PR活動を行った。

イ 活動内容

- ・過去2年間この活動に参加した生徒を中心に、円滑に運営された。
- ・高校生からの要望で、当初予定していた回数を超える実施となった。
- ・昨年度参加した大学生も加わり、高校生のリーダー性を発揮させるような指示により、高校生の生き生きとした活動が見られるようになった。

ウ 参加した生徒の様子

- ・生徒の中には一昨年度から継続して参加している者もあり、躊躇することなく大学生と協力しながら活動を進行するなど、生徒のコミュニケーション能力が向上してきたと考えられる。
- ・大学生との交流は、生徒にとって年齢が近いことから、様々なことを相談しやすく、毎週の活動を楽しみにしている生徒も見られた。
- ・毎回、最後に振り返りの時間を確保し、自分の感想を発表する時間を設けたことから、人前で自分の意見や感想を述べることに抵抗が少なくなった。その結果、学校生活でも、誰とも話すことなく1日を過ごしていた生徒から、挨拶をしたり、笑顔で話をしたりする光景も見られるようになった。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

少なくない人数ではあるが、小・中学校時代にすでに不登校を経験してきている生徒が、本校入学を機に生き生きと学校生活を送っているケースも多い。

イ その他の指標による評価

自ら積極的にボランティア活動に参加する生徒が多くおり、例年通り活動することができた。この活動は地域から感謝され、生徒は充実感や達成感を得ることができている。

ウ 生徒の変容した姿

自分から出会いの場やコミュニケーションを求めて動こうとする姿勢や気持ちを少しでも持っている生徒に対して、大学生との取組は大変有効であった。参加人数は最大で15人余りと大きく増えるまでには至らなかったが、比較的年齢が近い大学生に、大学生活等について進路相談をしたり、また、一緒にゲームをしたり学習支援を受けたりしながら楽しい時間を過ごすうちに、参加生徒も積極的に挨拶をしたり、笑顔が見られるようになった。

2 課題

本校入学をきっかけに登校できるようになった不登校経験のある生徒には、支援の手を差し伸べることができるが、学校に登校できていない生徒に対してどのように支援をしていくかが課題である。

問題を抱えたり、不登校傾向のある生徒の保護者から、スクールカウンセラーへの相談が多かったが、十分な時間の確保をすることができないという課題がある。

今後もスクールカウンセラーと連携を図り、生徒が少しでも登校できるような環境づくりを進めていきたい。

3 次年度に向けて

次年度も大学生の支援によるピア・サポートは継続する。加えて、新たにコミュニケーションスキルトレーニングの機会を設け、より多くの生徒が体験できる機会を拡充していきたい。

北海道札幌北高等学校

課 程： 定 時 制
学 科： 普 通 科
生徒数： 217名

1 取組の特徴

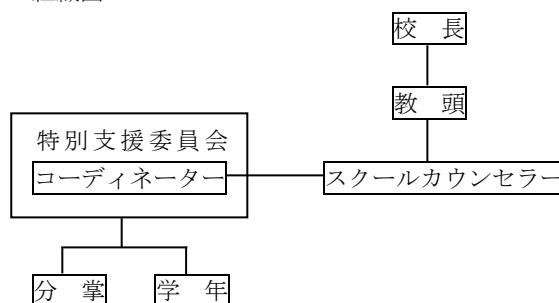
「人間関係づくりやコミュニケーションスキルの育成を図る」ことを目的とし、次の事項を重点的に取り組む。

- (1) スクールカウンセラーを活用したメンタルヘルスに関する取組
- (2) 学生支援ボランティアを活用した生徒の基礎学力の向上と自己肯定感の育成
- (3) 特別支援学校との交流による教職員の特別支援教育に対する理解とスキルの向上

2 取組のねらい

中学校時代に不登校のため基礎的な学力が身に付いていない生徒、中途退学する生徒及び教育上特別な支援を必要としている生徒など様々な生徒が在籍していることから、生徒の自立を促すために、生徒個々に応じたきめの細かい支援とケアが求められており、カウンセリングなどを通して生徒のコミュニケーション能力の向上を図る。

<組織図>



3 取組の経過

4月～9月

北海道教育大学の学生による学生支援ボランティア

5月～3月

スクールカウンセラーの活用1
(個別カウンセリングの実施)

5月 スクールカウンセラーの活用2

(新入生を対象とした講演会の実施)

7月 「ほっと」実施(1回目)及び分析結果の教職員での共有

10月～3月

北海道大学大学院生による学習支援ボランティア

11月 特別支援学校との交流事業①

(施設見学・授業参観・交流会等の実施)

12月 特別支援学校との交流事業②

(校内研修会の実施)

2月 「ほっと」実施(2回目)及び分析結果の教職員での共有

3月 スクールカウンセラーの活用3

(教員をとした校内研修会の実施)

4 取組の内容

1 学生支援ボランティアの活用

ア ねらい 生徒のコミュニケーション能力の向上

イ 対象 全校生徒

ウ 内容

本校では、5年前から、北海道教育大学札幌校の学生支援ボランティアを導入している。毎日4～5名の学生が来校し、授業に入って生徒の学習支援を行ってくれている。これまでは、大学の単位認定時期の関係から、10月以降のボランティアの人員確保が課題であったが、今年度は、北海道大学大学院教職課程の学生からも支援を受けられることとなり、年間を通じた取組となった。



学生支援ボランティアが参加した調理実習

4 取組の内容

エ 効果等

基礎学力の向上により達成感や自己肯定感の醸成につながっている。また、学生ボランティアは、本校生徒と年齢が近いと、学習面の分からないところを聞きやすい存在であり、学生とのやり取りを通して、生徒のコミュニケーション能力の向上も見られる。

2 特別支援学校との交流

ア ねらい 教員の生徒理解の深化

イ 対象 全教職員

ウ 内容

今年度から、北海道札幌稲穂高等支援学校と定期的な交流を実施している。本校において、「ほっと」の分析結果をより有効に活用するためには、発達障がいを抱える生徒や対人関係の構築に困難を抱える生徒など、多様な生徒に対応する必要があり、そのためには教員サイドが研修などを通して適切な指導方法などについて理解を深めていくことはきわめて重要なことと位置付けている。

今年度は、本校教員が北海道札幌稲穂高等支援学校を訪問し、施設見学や授業参観をさせていただくとともに、北海道札幌稲穂高等支援学校の教員にも本校の授業を参観していただき、生徒の実態に応じた指導の在り方について助言いただいた。

エ 成果等

交流を通して教員の特別支援教育への理解が深まった。



特別支援学校教員による授業参観

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

- ・中途退学者は全体として減少傾向にあり、特に、1年生において大幅に減少した。
- ・不登校生徒は前年度より増加した。

イ その他の指標による評価

- ・保健室利用者数及び相談者数（延べ人数）が減少した。
- ・生徒指導事故件数が減少した。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

- ・自分の意見を言うことができず、リーダーシップをとって集団をまとめることはしない。
- ・ルールを守ることができ、秩序ある落ち着いた生活を送ることができている。
- ・女子は、身近な人に相談したり、悩みを打ち明けたりすることができない者が多い。

2 課題

ア 「ほっと」の分析結果を活用した事例研究など教職員研修の充実を図ること。

イ 個別指導による特別支援教育の理解と充実を図ること。

3 次年度に向けて

ア 「ほっと」の計画的な実施と、分析結果を活用した教職員研修の充実を図る。

イ 特別支援学校との交流の充実を図る。

北海道余市紅志高等学校

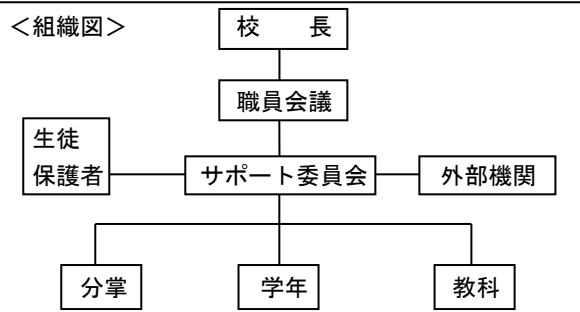
課程： 全 日 制
学 科： 総合学科
生徒数： 161名

1 取組の特徴

平成 22 年度に管内唯一の総合学科として開校し、1 年次生に必修科目「産業社会と人間」を学習させている。この科目の単元目標に、「キャリア教育の充実」と「コミュニケーションスキルの育成」を設定し、生徒のキャリア発達の向上を図った。1 年次生の総合的な学習の時間に、コミュニケーション能力の育成に向けたトレーニングを計画的に取り入れている。

2 取組のねらい

人間関係を上手に構築できないことにより不安定な心理状態となり、高校生活を有意義に送ることが出来ない生徒に対して、授業や地域との交流、ボランティア活動等を通じてコミュニケーション能力を向上させることを目的として取り組んでいる。



3 取組の経過

- | | |
|---|--|
| <p>4 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1 年次の宿泊研修における「構成的グループエンカウンター」 ・ 通学路清掃 ・ コミュニケーショントレーニング <p>5 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 担任面談 <p>6 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「ほっと」実施 ・ 余市養護学校での花壇作りと運動会ボランティア ・ 自転車マナー啓発活動 ・ 障がい者施設スポーツレク手伝い <p>7 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ スクールカウンセラーによる特別な支援が必要な生徒に対する面談 ・ 学校祭 | <p>7 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ソーラン祭のパレードへの参加 <p>8 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者施設との交流会 <p>10 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 障がい者施設との交流会 <p>11 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 通学路清掃、「ほっと」実施 <p>12 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 総合学科発表会 ・ 球技大会 ・ 余市養護学校との交流会 <p>1 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者施設との交流会 ・ アクティブ・ラーニングに関する校内研修会 <p>2 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 町内除雪ボランティア ・ 北海道教育カウンセリング ICT 活用事業による研修 |
|---|--|

4 取組の内容

(1) コミュニケーショントレーニング

ア ねらい 構成的グループエンカウンターやワークショップ、ワークシート作成などのアクティビティを通じて、自己理解・他者理解を深め、円滑なコミュニケーションやアサーションについての意識を高める。

イ 対 象 1 年次生

ウ 内 容

- (ア) 4 月 15 日 コミュニケーショントレーニング①「自己理解・他者理解」
- (イ) 4 月 21 日～23 日 宿泊研修において「構成的グループエンカウンター」の実施
- (ウ) 4 月 24 日 コミュニケーショントレーニング②「アサーション」「アンガーマネジメント」
- (エ) 5 月 13 日 コミュニケーショントレーニング③「ピアサポート」



4 取組の内容

エ 成果 年度当初からの計画的なコミュニケーショントレーニングを通して、生徒の人間関係形成能力やコミュニケーション能力の育成に役立った。また、継続的に取り組んでいることにより、教職員全体でその効果を共有できることから、コミュニケーショントレーニングが定着した。

(2) ボランティア活動

ア ねらい 生徒会やボランティア事務局と連携して全校的にボランティア活動に取り組むことで、協働の意識や奉仕の精神を養う。

イ 対象 全年次生

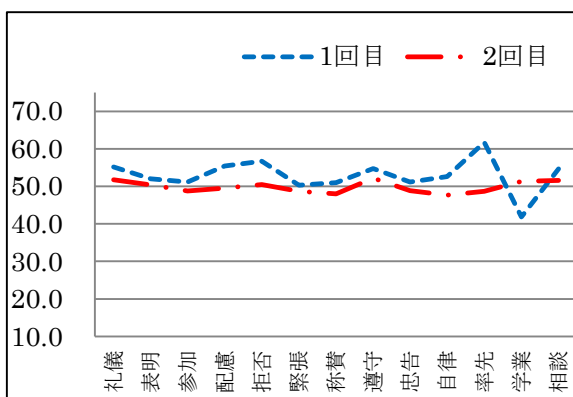
ウ 内容 ① 4月28日 春の通学路清掃 ② 6月6日 余市養護学校運動会手伝い
③ 6月16日 余市養護学校花壇整備 ④ 6月20日 町のボランティア講習会参加
⑤ 6月23日 自転車マナー啓発活動 ⑥ 6月27日 幸住学園スポーツレク手伝い
⑦ 7月4日 ぽれぽれペンギンクラブと余市ソーラン祭のパレード参加
⑧ 8月22日 高齢者施設フルーツシャトー余市夏祭り手伝い
⑨ 10月17日 障がいのある子と学ぶ「ムーブメント体験」手伝い
⑩ 11月9日 秋の通学路清掃 ⑪ 12月6日 余市学校餅つき手伝い
⑫ 1月24日 フルーツシャトー餅つき手伝い ⑬ 2月3日 高齢者宅除雪



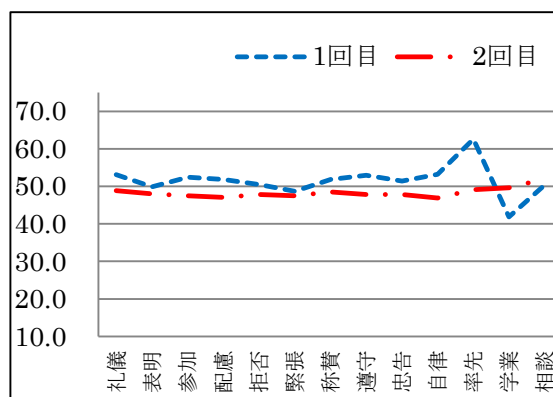
エ 成果 幼稚園からお年寄りまで幅広い年齢の方たちとのふれあいを体験することにより、世代を超えた人間関係が深まり、ボランティア活動に喜びや感動を得ている。昨年度までは、ボランティア事務局が主体的に取り組み、事務局員など特定の生徒の参加が多かったが、今年度は、生徒会からの積極的な参加の呼び掛けもあり、参加者が増えるとともに、生徒の地域の要請に応えようとする姿が見られ、生徒の自己有用感を高める取組となった。

(3) 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施・北海道教育カウンセリングICTの活用

ア 「ほっと」を1年次生対象に年2回実施（1回目6月10日、2回目11月30日）



【A組 経時比較】



【B組 経時比較】

4 取組の内容

- 1回目の結果から…2つのクラスは似た形状のグラフである。「学業」項目に課題が見られるが、「率先」項目の数値が非常に高く、リーダーシップ行動が取れる集団であり、全体的に平均以上の数値であることから、コミュニケーション能力は高いと考えられる。
- 2回目の結果から…「学業」項目の数値が上昇した。全体的に数値は下降したが、項目ごとの特徴が見られない結果となった。

イ 北海道教育カウンセリング I C T活用事業により、スーパーバイザーである北海道医療大学の富家直明教授から指導・助言を受けた。

成果：2回実施した「ほっと」結果の数値の見方、生徒の現状から数値下降の原因として考えられること、注意すべき数値の生徒など、具体的に指導・助言を受けることができ、今後の本校における取組に生かすものとなった。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者：平成25年度7名 → 平成26年度9名 → 平成27年度2名

不登校生徒数：平成25年度5名 → 平成26年度4名 → 平成27年度0名

イ その他の指標による評価

保健室利用者数：平成25年度1086名 → 平成26年度944名 → 平成27年度691名

一人当たりの欠席日数：平成25年度7.1日 → 平成26年度5.3日 → 平成27年度3.5日

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

コミュニケーショントレーニング後の「ほっと」の結果は、学業の項目を除いて平均値を上回っていたことから、コミュニケーション能力の向上が期待できた。2回目の結果から指導方法を模索していたところ、北海道教育カウンセリング I C T活用事業を利用して、専門家であるスーパーバイザーから、本校生徒の特徴を捉えた具体的な取組に生かせる指導・助言を受けることができた。

エ 生徒の変容した姿

中学校において欠席が多かった生徒や、対応に苦慮したとされる生徒も、トラブルを起こすことはなく通常の高校生活が続けることができています。

毎日の朝学習の積み重ねや授業にアクティブ・ラーニングを積極的に取り入れることなどにより、授業に主体的に参加する生徒の姿が見られるようになった。



2 課題

昨年度は「アセス」も実施することにより、多様な角度からの分析結果も用いて比較していたことから、来年度は実施する必要がある。

また、スクールカウンセラーとの日程調整が遅れたため、来校日が少なく個別相談のみの関わりとなったことから、日程調整を早める必要がある。

3 次年度に向けて

子ども理解支援ツール「ほっと」の実施について、今年度は1年次生のみだったので、全学年で実施し、教育相談活動の一層の充実を図る。

また、「ほっと」の結果を分析して学級の状態を把握し、教員間で問題解決に向けた意見交流を行い、早期に問題解決を図る。必要に応じて、今年度に引き続き北海道教育カウンセリング I C T活用事業によりスーパーバイザーからの指導・助言を受ける。